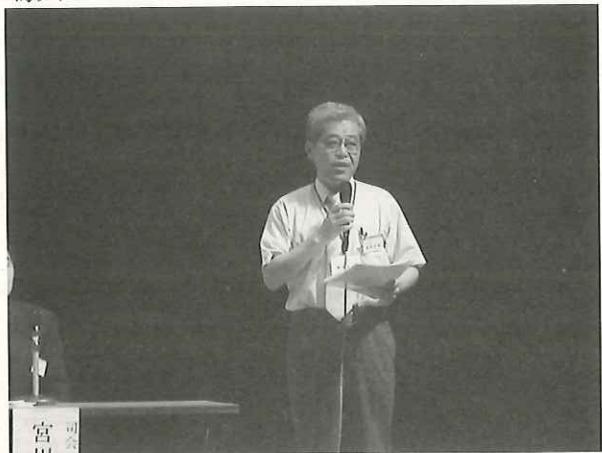


パネルディスカッション

<鳩貝>



これからパネルディスカッションを始めさせていただきます。進行は、新潟県獣医師会会員であり、日本小動物獣医師会学校飼育動物対策委員を務められている、宮川先生にお願いします。

<宮川>



ただいまご紹介いただきました宮川です。私は新潟市内で動物病院を開業しております。新潟県獣医師会では、10年ほど前から新潟市と委託契約を結び、現在114校の小学校に対し、担当獣医師を決め、治療や健康診断など、学校飼育動物に対する支援活動を行っています。

今日は「命の大切さを実感できる飼育を」というテーマで、基調講演、事例報告をいただきました。そこで、これからパネリストの先生方より、ほかの先生方のお話を聞きになった感想や、ご自分のご発表等について補足する点など、一言ずつご発言いただき、その後、ご参加いただいた方々からたくさんのご質問をいただいているところで、そのことにお答えいただくような形にしながら、このパネルディスカッションを進めていきたいと思います。

<矢部>

私は、日本小動物獣医師会学校飼育動物対策委員会委員長を務めさせていただいております。本日は、このような会を開催していただき、学校飼育動物対策委員として心より感謝申し上げます。また、鳩野先生の心のこもった、子供たちのことを思ったお話に、いつも感動させられております。さらに、森田先生の、お母さん方の心を動かしたお話にも、参加者の皆さんも感動されたのではないかと思います。このような活動は、まだまだ地に着いているとはいえないません。全国的にこれからさらにこのような活動を広められるよう、われわれは努力していきたいと考えておりますので、皆様方のご協力をお願いいたします。

<森田>

先ほど紹介させていただいた事例はかなり古くて、話に登場した子供たちは、すでに中学2年生です。私は現在小学校2年生の担任で、昨年1年間新たにモルモットを導入しましたが、これだけ年数が経つと保護者の考えもう変わっていきます。動物は、家庭ではなかなか飼うことができないということと、保護者自身が動物を飼ったことがないということも多く見受けられます。児童が週末モルモットを家庭に持つて帰ったとき、「初めて毛のある動物を抱きました。」というお母さんもいました。このようなことを考えると、学校でこのような活動をやらなかったら、一生動物に触れない可能性も考えられるわけです。手間もかかり、暇もかかり大変で、学級の中で飼育にまつわるトラブルも生まれますが、このトラブルが、今の子供たちにとって大切なことです。うまくいくようにするのではなく、失敗することこそ価値があるわけです。このように考えて先生方が取り組んでくださるとありがたいと考えます。

<町井>

先ほど、仔牛の導入のお話をしましたが、このことはどこの学校でもというわけにはいきません。先ほど鳩野先生から家庭と一緒に命の大切さを実感させていきたいというお話がありました。栃木県では、獣医師さんとの連携が進んでおり、学校で子供たちと動物との貴重なふれあい体験が多くもたれるようになりました。せっかくこのような体験が学校でできたのですから、これを家庭に持ち帰って、家族の方々と、動物のぬくもりのことや命の大切さについて話し合う機会をもてるようになればと考えています。そして、子供たちが自分の力で自分の命を守ってくれるようになれるよう、私たちもサポートしていきたいと考えて

います。

<嶋野>



先生方の発表を聞かせていただき3つのことを考えました。

1つめは、私は子供のトピックを紹介するようになっていますが、トピックには必ずストーリーがあります。動物飼育は、ストーリー性でとらえないといけないのではないかと思いますし、ストーリーが生まれるようにすることが飼育のポイントではないかと思います。

2つめは、体験と諸感覚を使った飼育をしていかなくては意味がないと思うことです。そういう意味では、2歳3歳という、言語が未発達の時代でも、動物飼育は可能ではないかと思います。

3つめは、命を実感できる飼育を広げていくことは十分できるのではないかと思うことです。そのためには、動物飼育を共有できる仲間たちの意識をもつことが必要だと思います。

<無藤>



矢部先生の調査と実践についてのお話がありましたが、そこではっきりわかるることは、獣医師の皆さんのが学校に関わることによって、学校飼育ということが学校に根付くことになるのではないかと思います。逆に言えば、獣医師の関わりがないところでは、学校飼育は根付いていかないことになってしまいます。したがって、獣医師と学校との連携をこれからも全国に広げていく必要性を強く感じました。

次に、命の教育はいろいろなところで呼ばれていますが、実際に命を大切にする体験を丁寧に行なうことが、収穫になると思います。活動なしに、ただのお話を聞いただけでは、子供の心には入っていないのではないかと思います。そういう意味では、動物飼育の体験を特に小学校でじっくり取り組むことが必要ではないかと思います。

最後に、幼児、小学生の場合は特に、飼育に関して科学的なことと、情緒的なことを繋げていくことが大切ではないかと思います。私は一方で、動物飼育は科学教育の基礎であり、もう一方で、命の教育の中心でもあります。小学校では、これらが繋がり得る時期で、その後中学生や高校生になると、分化してとらえていくようになり、このようなことを実践の中で考えていく必要があるのではないかと思います。

<滝川>



この発表をするに当たって、飼育活動を実践してきたわけですが、今日の発表を聞いて、改めて獣医師の先生方との連携が必要であることを実感しました。幸いにして、本園はそのことができているのではないかと思います。

今、毎日のように中川先生からメールで飼育の状況などについて届けていただいている。鳥インフルエンザで世間が騒いでいるときも、獣医師の先生にご指導をいただきながら飼育を続けました。このようなことは、保護者への説得力があるようで、保護者も安心して見守ってくれました。

これからも獣医師の先生方のお力を借りながら、飼育を続けていきたいと思います。

<宮川>

次は、パネリストとしてのみご助言いただく先生で、栃木県教育委員会学校教育課の田村先生です。

<田村>

私は小動物に関わる事業を担当させていただいており、3年目になります。事業内容については、先ほど矢部先生からご説明があったとおりです。

現在、本県では94%の小学校で、何らかの動物

を飼育している実態がありますが、それぞれ様々な課題を抱えており、本研修事業が昨年よりスタートしました。県内の15カ所の地域において、獣医師の先生が各地域に5~7名出向いていただいております。したがって、獣医師の先生1人に対し、学校現場の先生が5人乃至6、7人という、非常に密着した状態で開催できるため、高い成果を上げることができました。

その中で私が特に感じたことですが、先生方が実際に動物とふれあい、先生方が感動することによって、その気持ちが学校で子供たちに伝わるのではないかと思ったことです。

それから、本事業の目的でもある、学校の先生方と獣医師の方々とのコミュニケーションが、うまく図られつつあるということです。どうしても、お互い先生と呼ばれる立場で、普段ではなかなか敷居が高く、コミュニケーションが図りづらい状況がありますが、獣医師の先生方の動物たちに対する熱い思いが学校の先生方にも伝わり、お互いの垣根がだんだん低くなってきていることを実感することができたことが、事業をやってよかったです。行政として、これからどのようなことができるのか、今日は勉強させていただこうと思って参加させていただきました。

<宮川>

本日の発表を聞いて、「命を大切にする教育」がなぜ必要なのかということが明らかになり、実感することができました。また、動物を飼育することがどのような教育的意義があるのかということ、それから、今まで生命尊重の教育をしてはいたが、なかなかその成果が出てこなかつたことについて、その理由につきましても、今日の基調講演、事例報告をお聞きいただいて、十分にご理解いただけたのではないかと思います。

今回参加者の方々からいただいた質問の中に、動物飼育に対する悩みが多くありました。そこでまず、その中から愛知教育大大学院生の竹内さんのご質問を紹介します。

「それぞれの先生方のお話はすばらしいものばかりで、大変参考になりました。そこで、実践報告をしていただいた先生方に質問があります。飼育活動の中で、子供たちと動物たちとの出会い方は非常に重要であると思うのですが、実践の中で何か工夫されたことがありましたら教えていただけませんでしょうか」この質問に関連して、多かったご質問が、「アレルギーの児童に対する指導をどのようにすべきか」というものでした。このことに関しては、保護者の方々にご理解いただくのが難しいこともあるのではないかと思いますが、実践の中で工夫されたようなことがあります

たら、お願いいいたします。

<森田>



私の場合は、動物を子供たちと出会わせる際に保護者に対してもメッセージを送りたいと考えています。私の学校では5月の土曜日に保護者参観を開催します。そのときをねらって、初めて子供たちと動物とを出会わせます。したがって、その様子を保護者が見ることになります。そして、その場に獣医師さんにも立ち会っていただき、動物のプロとして、動物を介在させた教育がどのような意義があるのか説明していただきます。そして、子供たちとともに、保護者に対してもメッセージを送ることになります。こうすることによって、保護者の理解はかなり高まります。このように理念を理解していただければ、その後に生じる問題に対して、その都度対処することで解決することができます。

実際に私のクラスでも、アレルギーの児童が出ました。最初は何でもなかったんですが、ある日突然アレルギーの症状が出てきました。その児童は、それからはゴム手袋にマスクをして世話をしています。私は世話をしなくてもいいといっているのですが、母親がどんな形でもいいから参加させてほしいと申し出てきました。教室の中では、その児童は動物から一番遠いところに座らせています。また、教室の中でもマスクをするように心がけさせて、アレルギー症状が出ないような関わりをもたせるようにしています。

このように、最初の出会いの時に保護者にメッセージを送ることができれば、その後仮にアレルギーなどの児童が出た場合でも対処がしやすいといえます。

<滝川>

本園の場合は、もともと動物がいるということを保護者が承知して入園させてきます。そのことよりむしろ、動物が死んだ後に次に飼育する動物との出会い方に気を遣います。最初の動物が死ぬときに、非常に別れを悲しんで、死んだから次、

というわけにはいきません。死んだ後、ある程度期間を置き、子供たちと相談をしながら、次の動物と出会わせるというタイミングに気を遣います。

アレルギーに関しては、まず保護者と話し合います。子供と動物をどの程度かわらせてよいか、たとえば、アレルギーの症状をみながらえさだけあげさせるというように、保護者との合意のもと、関わらせるようにしています。

<宮川>

アレルギーのことに関しては、保護者の方の理解を当然得なければいけないわけですが、やはり、獣医師を交えた形で保護者の方々に説明できる機会がもてればいいということが一つです。また、アレルギーの子供が関わることのできるような飼育の方法が当然あるものだと思います。このようなことについても獣医師が専門的な知識をもっていますので、是非獣医師の支援や助言を求めていただけたらと思います。

<森田>

アレルギー症状が出ると、ほとんどの場合小児科にいきます。そうすると、小児科の先生は、毛のある動物をすべて排除するように言います。しかし、獣医師さんと話をすると、ネコの毛でアレルギーになってしまっても、モルモットの毛ではアレルギーにはならないこともあると言われます。ですから、アレルギーだと申し出てきた保護者には、何の毛に対するアレルギーなのか調べていただくようにしています。そのような知識を教員がもっていないといけないと思います。小児科の先生のおっしゃるとおりにしていたら、教室の中では動物は全く飼えないことになってしまいます。

<嶋野>

やはり保護者と密接に連携をとり、アレルギーの原因についてしっかりと把握しておく必要があると思います。また、このことについて、子供自身が知つておくことも大事です。さらに、懇意な専門医をもつということも大切なことだと思います。教員が何でもかんでも知つていなければいけないということになると、教員の負担がまた増大することになるので、われわれは教育の専門として力を注ぎ、アレルギーに関しては、懇意な獣医師さんや小児科の専門医をつくって、支援を仰ぐようにする必要があると思います。

<宮川>

このことに関連して、東京都の上山先生から、「子供がアレルギーだから、動物が嫌いだといっています。アレルギーに関して専門的な知識が得られるところをお教えいただきたい」というご質問がありました。このことについても、今のお話

を参考にしていただけたらよろしいかと思います。

続いて同じく上山先生から、「動物を飼育する中で、継続的に飼育し続ける難しさを感じています。対応策として考えられるアイデアはないでしょうか」というご質問があり、さらに、「仔牛の行く末はどうなりましたか」というご質問もありました。町井先生に、動物飼育の継続性ということと、仔牛の行く末についてもお話を伺いしたいと思います。

<町井>



仔牛は、歯が生えてきたり角が生えてきたりすると危険性が出てくるので、1か月限定で飼育しました。そして、牧場に返すときは、「ももちゃん」と書いた耳冠をつけてもらいます。生まれて2年経つと搾乳できるような状態まで成長します。ですから、1年生には、2年生になったら搾乳にいこうねと話しています。また私の小学校の近くに駅があるのですが、ももちゃんのために粘土で何か作つてもついてあげようという計画を立てたりしています。また、育てたサツマイモでスイートポテトを作ったときには、長島さん(仔牛のオーナー)を呼ばうという計画を立てたりもしています。このようにして、子供たちの気持ちはずつと繋がっていて、実際にSLに乗つて秋に牧場に行きました。子供たちは「ももちゃん覚えていてくれるかな」などと言いながら、気持ちを高ぶらせて会いに行きました。また、家族でもももちゃんに会いに行つたりもする子供たちもいました。このように、1年間という短い期間ではあったものの、ももちゃんという仔牛を中心とした生活科を展開していく中で、ももちゃんと子供たちは、気持ちがずっと繋がつていています。

<宮川>

継続的に飼育を続けるということについて、森田先生いかがでしょうか。